

2024年2月4日（顕現後第5主日、B年）

牧師メッセージ

「イエスですら、祈らなければならなかった」

（マルコによる福音書1:29-39）

司祭ヨセフ太田信三

「神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい。」と宣言した主イエスとともに、神の国が訪れます。主イエスの行かれる所に神の国が示されます。先週も申し上げましたが、奇跡は「しるし」です。それが何を示すものであるかを知ることが大切です。今日の奇跡を巡ってはいくつか言えることがあります。まず、奇跡がなされた場所についてです。会堂からシモンつまりペトロの「家」へと移動し、そこで主イエスは奇跡を行い、さらに日が暮れてから、今度は家の戸口で奇跡を行いました。これはつまり、主イエスは宗教的な場所である会堂のみならず、ペトロの家のようなわたしたちの普段の個人の生活の場においても、そして家の戸口に象徴される公の場においても、人間を苦しめる一切のものを追い払うということです。つまり神の国はどこか遠くにあるのではなく、また特定の場所を指すのでもなく、イエスがおられるところに神の国は訪れるのです。

次に神の国は時間にも縛られないということです。イエスは安息日の昼間でも、午後でも、そして日が暮れた後にも癒やしました。神の国は、ある一定のときにだけあるものではなく。イエスがいるその時その場所に神の国が実現するのです。

次に注目したいのは、ペトロの姑が癒やされたことです。彼女は発熱していました。発熱とは、わたしたちにとっても身近なものです。主イエスはそういう日常のたとえ些細な事であっても、関わってくださるということです。これらのことから言えることは、会堂でも、家でも、戸口でも奇跡を行った主イエスは、わたしたちの人生の些細な出来事から、社会全体のことまでもつぶさにご覧になり、関わってくださるのであり、神の国は時空を超えて主イエス共に訪れるということです。当時、悪霊は人の生きる力を弱めて、病を引き起こすばかりか神との関係を妨げると考えられていました。ですから、主イエスのなされたことは病の癒やしであり、神との交わりの回復でした。つまり、主イエスはあらゆるところ、すべてのところにおいて、わたしたちを悪霊から解放し、神との関係を回復し、神の国へと迎えてくださるのだということです。これが、今日の奇跡というしるしがわたしたちに示していることです。それゆえ、主イエスは一ヶ所に留まることなく、「他の町や村」へと出かけていきます。

主イエスは朝早く、独りで人里離れた所で祈りました。祈りにおいて神との深い交わりにいつも身を置き。この交わりに支えられて主イエスは働いたのです。主イエスですら祈ったのです。であればなおさら、わたしたちは祈らなければなりません。わたしたちが祈ることができるのは、イエスが時間も場所も超えて共にいてくださり、そこに神の国が実現するからです。わたしたちが祈るなら、それがどこであれ、どんな時間であれ、主イエスが聞いておられ、神との交わりに迎えてくださる。今日の福音はその大いなる恵みまでも、わたしたちに示しています。